慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	一言の重さ
Sub Title	
Author	宮島, 司(Miyajima, Tsukasa)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2010
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.83, No.11 (2010. 11) ,p.202- 204
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	倉澤康一郎先生追悼記事
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20101128-0202

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

一言の重さ

人はみな人生の中で心から尊敬できる幾人かの先人・先輩・師を思い浮かべることができるはずである。われわれのような仕事をしている者にとっては、そのことが学問的な意味での尊敬の対象であるということもあれば、人としての生き方・あり方が対象の場合もある。私にとっての倉澤先生は、まぎれもなくその両方の意味において追いつこうにも追いつくことのできない、尊敬・敬愛・追慕の対象の方であったといってよい。

学者としての倉澤先生の残された業績の輝きについては、今更あらためて述べるまでもない。晩年にいたるまでの学界における先生のご活躍ぶりをみれば、誰しも異論をはさむ者はいないはずである。紙幅の関係上本記事では触れることができないが、先生の学問のすごさ（という表現さえでてしまう）の一端は先生の還暦記念論文集（『商法の判例と論理』（日本評論社、一九九四年））のあとがきに私が拙文を寄せているので、是非ご参照いただければ幸いである。

また、学者としての先生は、多くの弟子を残されている。先生の直接の教えを受けた弟子達が多くあるのは当然として、慶應義塾と関わりのない商法研究者の何人もが、倉澤先生の弟子である、あるいは倉澤門下であると言ってはばからない。自らも大家をなしておられるはずの早稲田大学元総長奥島孝康教授も、師弟関係の係累にうるさい早稲田大学におられながら、ことあるごとに自分は「倉澤先生の一番弟子である」と公言されている。多くの研究者が先生の元に集まるのも、単に学問のすごさゆえではなく、人としての先生の生き様・カッコよさへの思慕があったからに違いない。そして、押しかけ弟子であってもすべてを喜んで迎え入れ、すべての者に等しく惜しげもなく学問の難しさと喜びをお示しくださったのは、先生の学問に向かう真摯な姿勢の表れであったのであろう。

本来であれば直接の弟子筋ではない私も本当にかわいがっていただいた。先生が私のそばにおられなかったら、そしてあの一言がなかったら、今の私があったとは到底思えない。かくも私にとって先生の存在は大きなもので

あったし、先生のたった一言がどれだけ私に重いものであったか。

「せっかく留学から帰ってきたことだし、デビューの場でもあるんだから、無難にフランスの企業結合法を演題にしておいた方がいいんじゃないの？」、「慶應の金看板背負っているんだから。今の報告とても面白いんだけど、誰も言ったことのないそんなこと発表して袋叩きにあったら困るからね。フランスの企業結合法についてなら、留学から帰ってきたばかりで情報もたくさん持っているし、君が一番詳しいんだから、それにしておきなさい。」

忘れもしない昭和五八年六月の慶應での商法研究会の後のことである。一〇月に予定されている私の学会報告の予行演習のために開催してもらった研究会の後、何人かの指導教授にあたる先生方から呼び出されて伺った言葉である。とても悔しかった。その時までの渾身の努力を、そして学会へのあるいはそれまでのその分野の学問への挑戦を否定されてしまったようで。何のための学会なんだろうと。でもデビューの場でもあると言われてみると、確かに傷ついたまま飛び立っていく危険（もしかしたら飛び立つことさえできなくなってしまうかもしれない危険）を慮ってくださる先生方のお気持ちも分からないではなかった。本当に常日ごろからそのような優しい先生方でもあるし、自分も弟子にはそのような助言を与えてしまうかもしれないからである。不承不承「はい、分かりました」と言いながら、心の中では悔しくて仕方なかった。悔しさのあまり、確かその足でだったと思う。当時は直接の指導教授ではなかったけれど、倉澤先生の研究室に向かった。後に、酔った席になると必ず先生がおっしゃられるのは、「泣きながら俺のところへ来て、お前は『あれで報告をやらせてください』と言った」とのこと。ものすごい形相だったかもしれないけれど、決して泣いてはいなかったはずである。倉澤先生がだめというようなものなら、あきらめるしかないと思ってはいた。その覚悟でお目にかかりにいったのである。

先生のたった一言、「お前、壇上で死んで来い」。ただただうれしかった。

商法の巨頭とも言われていた田中誠二先生のその学会

の場での一言、「宮島君。僕は君の考えに反対だね」。ただただうれしかった。反対ではあるにせよ、あの大先生が一つの考え方として相手にしてくださった。一つの世界をきわめた一流の人物の、たった「一言」ほんの「一言」の重さ。自分自身に身を置いて考えた時に、自分がこのように与えていただいたものと同様の喜びや感動を、例えば弟子や学生に与えることができているか、情けないことにはなはだ自信がない。

法学部教授　宮　島　　司